



秋元雄史がゆく、九谷焼の物語

LIBRARY

“絵描き”として 独自の表現を追求し続ける

第五話

第4話から続く作家工房探訪。今回は北村隆さん・和義さん親子を訪ねて「竹隆窯」へ。九谷焼の特徴ともいえる文様の過剰さを表現する隆さんと、新たな取り組みに挑戦する和義さん。熱い思いを持った二人が考える、九谷焼の魅力や可能性とは。

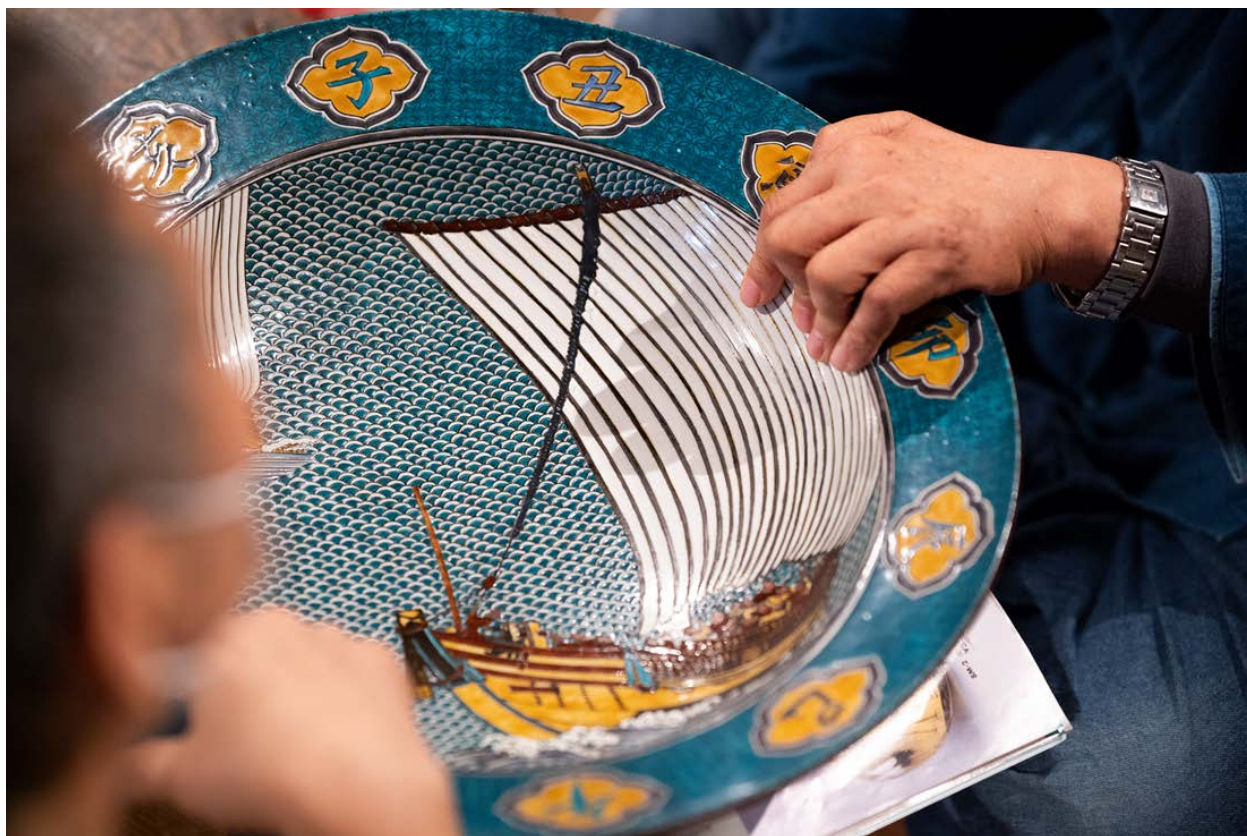
「LIBRARY 秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは

長い歴史に育まれてきた九谷焼の「技」は、いかに生まれ、今後どのように変化していくのでしょうか？KUTANism総合監修・秋元雄史が自らその現場に足を運び、ナビゲーターと対話をするなかで、九谷焼を再発見していく連載シリーズ。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

WEB版はこちら





#05

“絵描き”として独自の表現を追求し続ける

KUTANism全体監修・秋元雄史が自ら現場に足を運び、ナビゲーターと対談をするなかで、九谷焼を再発見していく連載シリーズ「秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」。第4話から第6話は「技法の継承と個性」をテーマに、九谷焼を代表する技法と技の引き継がれ方に迫ります。今回伺ったのは小松市にある「竹隆窯」の北村隆さん、和義さん親子です。

お邪魔したのは、念仏道場を移築した独特の世界観が漂う工房。九谷焼の特徴ともいえる文様の過剰さを前面に押し出した作品を展開する北村隆さんと、隆さんから作風を受け継ぎつつ、新たな取り組みで自身の表現を広げる和義さん。表現方法は違えど同じように熱い思いを持ったお二人に、九谷焼の魅力や可能性をお聞きました。

目次

- ✓ 九谷焼に並々ならぬ情熱を注ぎ、魂を込めた作品を生み出す
- ✓ 企業とのコラボ作品で九谷焼の魅力を発信
- ✓ 工芸家として、大好きな絵で勝負する
- ✓ この回のまとめ



案内してくれた人

北村隆さん(左)、北村和義さん(右)

北村隆さん(左)。1946年、石川県生まれ。1973年、第6回日展に初入選、以降27回入選。第15回日本現代工芸展初入選、以降連続入選。他、数々の展覧会で入選・受賞。1995年、第27回日展にて特選受賞。1997年、伝統工芸士に認定。北前船をモチーフにした作品を多数手掛ける。

北村和義さん(右)。1974年、石川県生まれ。九谷焼技術研修所を卒業後、作家として活動を開始。2002年、第58回現代美術展次賞、翌年、同展佳作受賞。2004年、第36回日展に初出品した黒彩「胡蝶の夢」が初入選、以降、入選を繰り返す。2010年、第66回現代美術展最高賞受賞。企業とのコラボレーションにも積極的に関わり、タカラ・トミーやベアブリック、ユニクロ、新世紀エヴァンゲリオンなど、数々のコラボ作品を生み出す。

九谷焼に並々ならぬ情熱を注ぎ、
魂を込めた作品を生み出す



秋元： 本日はよろしくお願いします。竹隆窯について、それからお二人のそれぞれの仕事についてお話を伺えますでしょうか。

隆： 恥ずかしいんだけど、わしは陶芸の出身じゃないの。中学を卒業してから、長男ということですからすぐに働かなくちゃいけなくて。町工場の鉄工所に入って、途中で職業訓練所に通ったんだけど続かず、たまたま近隣の会社から機械を譲り受けられることになって繊維関係の仕事を家の納屋で細々としていたのね。ある時、この辺には人間国宝の吉田美統先生や中田一於先生など有名な先生がたくさんおいでるんだけど、金沢の兼六園などにお

土産物の配達を頼まれたことがあったんや。そのときに初めて九谷焼の作品を見て、すごく綺麗で、これええなあって、やってみたいと思ったんや。



隆：でも、経験もないし美大も出とらん。どうしようかと思っていたら、死んだ母親に「そんなにやりたかったら、昼間仕事して夜勉強してみたら」って言われて。うちの近くにある九谷焼産地問屋「九谷極彩 中田龍山堂」に、細描が得意な腕のいいおじいちゃんがおってね。「じいちゃん上手いな」って言うたら、「わしは今75歳やけど、職人になった方がええぞ。職人は腕さえ持てれば、一生食べるのに困ることはないぞ」って。



隆：わしは当時、20歳そこそこだったんだけど「中学しか出とらんし、美大も出とらん。それでもできるか？」って聞いたたら、「バカ！俺は小学校も出とらん。職人に学歴は要らん」って言われて。それでじいちゃんに色々教えてもらって、でもね、初めは誰も相手にしてくれなかった。ほんで、どうしたらいいかなあと思っていたら「偉い先生に見てもらわないとだめや」って言われて、それで二代・浅蔵五十吉先生を紹介してもらって教わりに行ったんや。浅蔵先生のもとで学んでいるときに日展に出品して初入選して、それから何年か連続で入選した。

秋元：日展入選は、この仕事を始めて何年目くらいだったのでしょうか。

隆：26、27歳だったから始めて5、6年経った頃かな。でも入選はしても、なかなか賞が取れなかった。そのうちだんだん賞が欲しくなってきて、金工家で石川県美術館館長も務めた高橋介州先生に相談したり、大樋長左衛門先生や橋田与三郎先生を訪ねてアドバイスを受けてたりして。

秋元：大物の先生方ばかりじゃないですか笑。

隆：橋田与三郎先生には「いい作品を作ってもってこい」って言われて。「いい作品ってどんな作品や？」って聞いたたら、「誰が見てもいい作品や。そんなこと聞くな、お前の感性で作ってこい」って笑。それで仕上がったものを見せに行ったら、形や色について意見をくださって、その結果、特選を受賞したんや。

秋元：名だたる先生方から直接ご指導いただいたんですね。圧倒的だなあ。これまでずっと展覧会をベースに作品を作ってきたのでしょうか？



隆：展覧会はベースにしていなかった。

秋元：それでは生計はどのように立てていたのでしょうか。当時は日本国内の景気も良くて業界としても右肩上がりの時期だったと思うのですが、展覧会は別として、そういった作品はどこへ卸していたのですか？

隆：生活のためには、とにかく一般の方に手に取ってもらえる作品を作らなきゃいけないと思って、

隆：それで金箔に鶴の絵を描いた作品を考えついたんや。九谷の場合は作家の作品をまとめたカタログを組合が作ってるんやけど、当時はギフト需要で縁起物が人気で、これが大ヒットした。



秋元：日用品としての九谷焼というよりも、花瓶や花生、壺など観賞用が多かったのですね。お話を伺っていると、ずいぶん順調にここまでこられたようですが。

隆：苦労した時期もめっちゃある。初めの頃はずっとお金に余裕がなくて、とにかく月10万円売るのが夢やった。ちゃんとした工房もなく廊下で一人で描いとってんもん。この仕事を始めて10年間は全く売れんかったね。

秋元：この作品が生まれたのはいつ頃なのでしょう。

隆：これはだいぶ後になってからやね。あるとき、東京の美術館に尾形光琳とか俵屋宗達を見に行っくん。「これええな」思っけん。それで影響を受けたんや。

秋元：琳派(※)ですね。

(※)17世紀初めの俵屋宗達や18世紀初めの尾形光琳らによって京都の町人文化として生まれ、19世紀初めに酒井抱一や鈴木其一らによって江戸(現在の東京)に引き継がれた、都市の美術。屏風などの背景に金地や銀地のみを用いて、自然や人物、動物などをモチーフに描く。有名な作品に「風神雷神図」(俵屋宗達)がある。

隆：琳派や。金沢の金箔を使って、どっちか言うと琳派を真似たみたいなものやけど、当時はこれがよく売れた。これのおかげで、ご飯を食べることができた。わしが40歳のときだから、今から35年前くらいのことやね。

秋元：80年から90年代にかけては、九谷焼が最も売れていた時代ですね。かなり景気が良かった頃かと思いますが、やはりギフトは飛ぶように売れたのでしょうか？

隆：九谷焼の全盛期やな。8号線沿いとか兼六園の土産物屋に作品を持っていくと、団体旅行の観光客がみんな買って行っくんや。当時はこれがわしの基本だった。今は船ばかり描いとるけどな。

秋元： 北前船、次のテーマですね。



隆： 加賀市橋立に「北前船の里資料館」があるんやけど、わし、初めて北前船の歴史を知ったときに感動してな。北前船の口マンを作品にしたいと思ったんや。日本中探してもな、船を描いとる作家っておらん。でも、わしはものすごく興味を持って「これを残そう」思って学会にも入って勉強して、ほんで描いたんや。初めは誰にも相手にしてもらえなかったけど、だんだん人気が出てきた。

隆： もう一つ、わしはものすごく古九谷の色を作りたいかってん。なんでや言うたら、誰も色の調合を教えてくれんくて。福山虎松(※)とかの作品を元に色を作ろうとしてみたけど、当時と全く材料が違うから、なかなか上手に色が出ない。それを長年研究して完成したのが今の色ねん。

(※) 明治時代の陶工。井上商店「陶源堂」窯にて、古九谷風の絵付けに励んだ。

秋元： 古九谷の色は誰からも教わらずにご自身で作られたのですか!? さらっと語っていますけど、皆さんだいたい古九谷の再現に苦労していますよね。

隆： だって師匠がおらんかったもん。本物を買って勉強したんや。たくさん持つとるぞ。たぶん作家の中で一番古九谷を持つとるのはわしやと思うな笑。

秋元： すごいなあ。相当高かったでしょうに。



隆： この皿見てみて。これが俺の色ねん、九谷にしてはいい色やろ。触ってみると分かると思うけど、これだけ盛れとるんや。

秋元： 重たいですね、本当にすごいなあ。一言に釉薬を研究すると言っても相当大変ですよ。

隆：大変やった。けど、苦労したことを誰かに言うたってしゃあない。禅から教わったんやけど、百回失敗しても一回良いもんができたなら全部忘れる。そんなもんや。

秋元：それにしても、なかなかその境地には辿り着けないですね。

企業とのコラボ作品で九谷焼の魅力を発信



秋元：和義さんがこの道に進んだきっかけはなんだったのでしょうか？

隆：わし、息子に一回もこの仕事を継いでほしいとか言ったことないねん。教えたこともないし。「門前の小僧、習わぬ経を読む」みたいなもんや。

和義：うーん、なんでだろう。やっぱり父が楽しそうにこの仕事をしていたからだと思いますね。父が言う通り、僕が小さい頃は貧乏でしたよ笑。お金がないから自転車も買ってもらえなくて。でも努力しているうちに、うちもだんだん大きくなってきたし、やっぱりこの仕事で育ててもらいましたから、気づいたときにはこの道を志していました。

秋元：どのような経歴を歩まれたのですか？

和義：地元の普通高校に通っていたのですが、絵を描くのが好きだったので卒業後は美大に入りたいと思って学生時代はずっとデッサンを習っていました。美大には落ちて別の美術学校に入学して、卒業後に九谷焼技術研修所に入り、そこで初めて九谷焼というものを勉強しました。入学してまもない頃、山岸大成さんのお父さんが講師を務める色絵の授業があったのですが、その授業で呉須(下絵)描きから上絵付けまでを学んで初めて自分が手掛けた作品を焼き上げたときに「僕も九谷焼って作れるんだな」って、すごく感動したんです。かつ面白くて。そこからはもう、のめり込んで勉強しましたね。

秋元：基本的には展覧会を発表の場として活動をしているのでしょうか。



和義： うちの窯に入ったばかりの頃は展覧会にも出品していたのですが、最近では出していないですね。23歳のとき、僕は今年で47歳になるので24年前になりますね。作家になって初めのうちは、どうやったら世の中の人に自分の作品を知ってもらって生計を立てられるか、というのが全く分からなかった。なので、ひとまず何でも挑戦してみようと思って展覧会に出品していました。その後、展覧会への出品を15年ほど続けて、だんだん自分の作りたい作品と展覧会に出す作品がリンクしなくなってきたときに出品をやめようかなと。個展と展覧会のどちらに力を入れようかなと考えたときに、僕は個展に力を入れていきたいと思ったんです。

秋元： では現在の発表の場は個展が中心になるのですか？

和義： そうですね。今年も7件の個展を予定しています。すでに来年の予定も入ってきています。ありがたいことに日本全国、ずっと個展回りをしている感じですね。

秋元：すごい数だなあ。やっぱり百貨店での個展が多いですか？

和義： 百貨店が多いですね。画商さんともお付き合いがあるので、手伝ってもらうことも少なくありません。

隆： 最近では展覧会で賞を取っただけでは、なかなかお客さんも買ってくれんわ。肩書きだけでは物が売れん時代やもん。やっぱり作家の個性とか魅力とか、その作品の価値を感じてもらえるようなものを作らないと難しい時代にはなっとなあ。



秋元： 竹隆窯は何人体制で営んでいるのでしょうか。

和義： 僕と父のほかには職人さんが5人いて、完全分業制で回しています。設備としては窯が5台ありますね。

秋元： 職人さんがいらっしゃるということは、作家として手掛ける作品以外に窯として制作している商品ラインナップもあるのですか？

和義： そうですね。個展に向けた作品のほかに、飲食店から依頼を受けた食器や、少なからずギフトや記念品、引き出物の注文も入りますので、そういったことにも対応しています。



和義： 僕は企業から依頼をいただいて色々なコラボ作品を作ったりもしています。これは「モンスターストライク(モンスター)」というゲームのキャラクターをモチーフにした作品です。

秋元： すごく今っぽい面白いですね。九谷焼ってそれ自体が芸術ではあるんだけど、一方で、その時代の流行を捕まえて作風に反映しているところもあるじゃないですか。和義さんのコラボ作品も一種の「九谷的」な作品のように感じます。

和義： 九谷焼って分かりやすいんですね。特別な知識は必要なくて、絵が綺麗とか技が細かいとか、カジュアルに楽しんでいただけるのが一つの魅力だと思っています。

秋元： 良い意味での軽さというか現代性のようなところが、九谷焼の面白いところなのかもしれませんね。



ガンダムカフェオープン記念企画として「機動戦士ガンダム」とコラボレーションした作品、7号皿「ガンダム×シャア専用ザク」。

和義： 初めてのコラボ作品は「チョコロQ」で、東京おもちゃショーに展示していただいたんですけど、そのときに若い子たちが携帯で写真を撮っていく姿を見て衝撃を受けたんです。九谷焼を並べて楽しそうに写真を撮る姿なんて見たことがなかったから、このような形で九谷焼をPRしたら、これまで興味がなかった人にも振り向いてもらえるのかなって。それから企業から依頼をいただければ、断らずに全力で取り組むようになりました。

隆： 俺と息子、同じ九谷で同じ色も使ってるんやけど、こんだけ感覚が違うなんて笑。時代っちゃ時代だな。

これでご飯食べていかなきゃいけないから簡単そうで厳しい。でも楽しいわな。

和 義： どの業界でも同じかとは思いますが、もちろん苦労もありますけど、作り手ってそれが大好きだからやっていけるし、やっぱり好きなもので生きていけるっていうのは純粋に楽しいですね。

隆： 九谷の作家って全部個性が違って面白いわ。

秋 元： そうですね。作家によっていろんな個性があるっていうのは面白いと思います。九谷焼って割と自由じゃないですか。何をやってもいいっていう。上から何かを押し付けるようなことも、型にはめようとするものもないですし。やっぱり、それが九谷焼の面白さを作っているんだと思いますね。どんな表現をしても「こうしなきゃ九谷焼じゃない」とか言わないじゃないですか。そこが今の時代に合っているように感じます。



隆： だから全国各地で九谷の作家が活躍しとる。いいことやな。

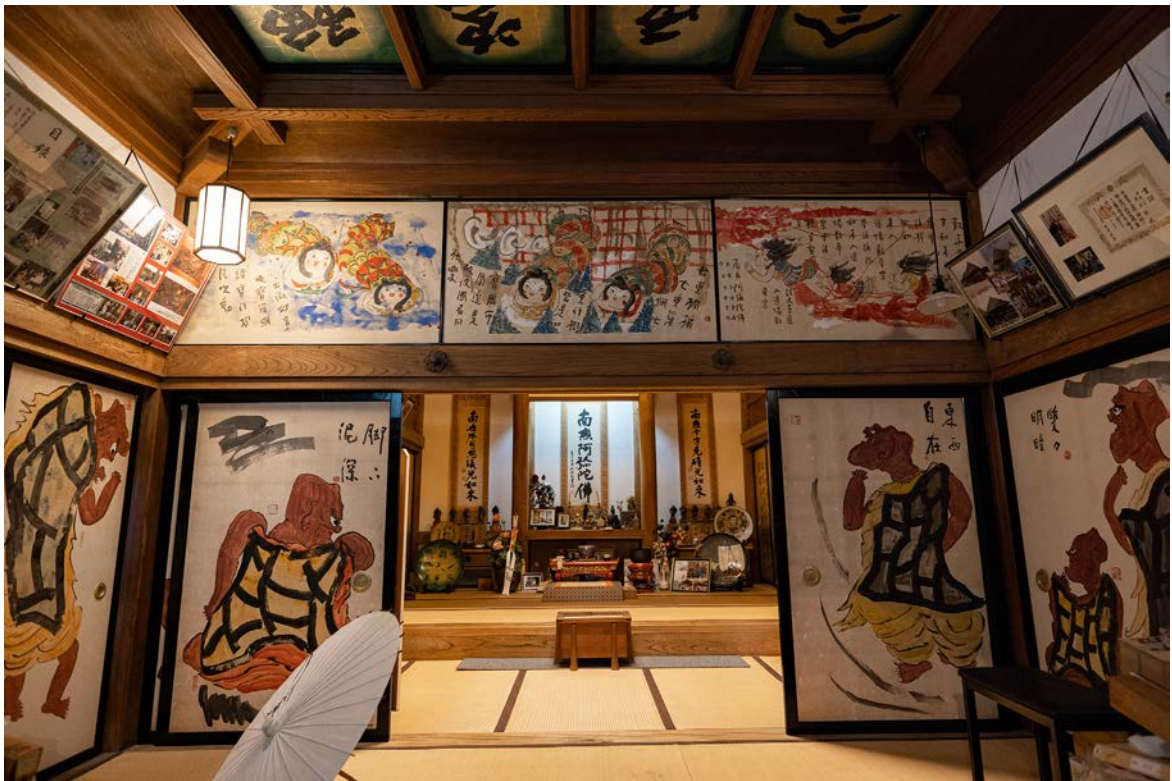
秋 元： すごくいいことですよ。一昔前だったら「節操がない」みたいなことを言われたかもしれませんが、多様性や個性を尊重する現代においては、とても良い意味で作用している気がします。

隆： 九谷焼の産地は県外出身でも快く迎え入れてくれるし、九谷焼技術研修所にしたって、卒業後に県外へ出て何も言わんがね。その体質がいいのかも知れんな。

秋 元： 研修所も含めて、九谷が持つ自由な雰囲気は良く出ていますよね。加えて最近では、若手作家が活躍してどんどん名前が広がっているじゃないですか。そうすると、これから九谷焼を志す若い人たちにとって「自分も努力をすれば人気作家になれるかもしれない」という希望になるので、ますます若い人材が入ってくることにつながると思います。

隆： 若い人が増えれば文化も広がるしな。わしは、九谷はいいとこやなあって思う。今の時代に九谷をやってる人は自由に表現しているところが面白いと思っとるよ。

工芸家として、大好きな絵で勝負する



富山県利賀村にあった念仏道場を、2年の歳月をかけて移築した建物を工房としている。総檜造りの仏間をはじめ、隆さんと親交のあった東大寺の名僧・清水公昭氏による襖絵は圧巻。



1650年頃に小松城内に建てられた茶室の部材を譲り受け再建したもの。



和義さんのアトリエ

和義： 建物内は迷路みたいになっているんですが笑、僕のアトリエはここになります。

秋元： 素地から全てご自身で作っているのですか？

和義： 基本的には、素地は素地屋さんにお願いしています。昆虫とか特殊な立体は自分で作っていますね。僕は昔で言う絵描きみたいなものです。

秋元： なるほど。絵に専念していらっしゃるのですね。



瀧下和之×北村和義コラボレーション作品「色絵金彩 鬼に金棒。」。

和義： これは画商さんが画家の瀧下和之さんを紹介して下さいて生まれた作品です。かなりヒットして100体ほどが売れました。

秋元： すごい人気だなあ。



和義さんの作品は、はじめに下地となる黒色を塗り焼成、その上に色を重ねていく「黒彩(こくさい)技法」というオリジナルの技法が特徴。重厚感があり奥深さを感じる表現を生み出している。

秋 元： 作品の個性を作ること自体に、苦労したことはないのですか？

和 義： ありますね。正直、僕から見ても父親ってすごい人なんですよ笑。一代でここまで窯を大きくしたことも立派ですし、あとは圧倒的な人間力があるというか。僕がどう頑張っても叶わないところがたくさんあると思っています。そんななかで、別に意識はしていないんですけど、やっぱり父親と同じことをしては僕の世界は到底作れないだろうなと、どこかで思っていたところがあって。あえて違うことしようとしたわけではないですけど、気がついたらこんな感じになっていました。

秋 元： 私はお二人の話をお聞きしながら、良い関係を築いていらっしゃる印象を受けました。同じ仕事を親子ですることや代を引き継ぐことの難しさってあるじゃないですか。世代交代が上手くいかない親子もあるなかで、隆さんと和義さんは互いの仕事を認め合っていますよね。

和 義： そうですね。否定することもないし、そもそも僕たちの仕事に正解なんてないですから。

秋 元： でも、ともすると「九谷とは」みたいな話になりすぎちゃうこともあるじゃないですか。



和 義 工芸っていわゆる生活の美だと思うので、僕の作品が「九谷焼だから」というよりも、「部屋にちょっと飾ってみたい」とか「玄関に置いてみようかな」という感じで買ってくださる方のほうが多いと思うんです。なので、もちろん作っているものは九谷焼ですが、個展をするにしても昔の写しをしているだけではだめなので、いかに自分らしさを出すかということは常に意識しています。自分の作品として何かストーリーを伝えられるような絵が描きたいと思って日々制作をしていますね。

秋 元： 九谷焼というものに必要以上に囚われすぎないように、ということですね。最近の作家さんたちは、より个性的になってきているというか自由な感じになってきていますよね。私はすごく良いことだと思っています。

和 義： そうですね。自由で前衛的な九谷を発表する場が増えてきていたり、そうした作品を買ってくれる方も増えてきている実感があります。九谷のこれからを担う若い人たちが「自分も作家としてやっていけるんじゃないか」って思える。それって産地の発展にはすごく大事なことですよね。

秋 元： 技術的な話を伺いたいのですが、絵付けはどのような手順で進めているのでしょうか？



和 義： まずはベースとなる絵のシルエットを和紙に描いて、原寸大の型紙を作ります。これが九谷の伝統技法なんですけど、その型紙を素地にのせて擦ると絵が薄く移るんです。この上からなぞって輪郭を描いていきます。ご覧のとおり型紙で移せるのはあくまでシルエットだけなので、細かな模様はその時々で描いています。

秋 元： はじめに輪郭だけを描いて細かな模様は作りながら考えるという方法は、昔からあったのでしょうか？すごく即興性が高いですね。

和 義： 現在でもそうだと思いますが、九谷焼技術研修所では、まず始めに小紋の描き方、描き順や補助線の引き方を教わるんです。その知識があるから七宝模様や青海波なども応用しながら描くことができる。九谷焼の勉強した人たちにとって小紋の知識があるというのはすごく大きくて、伝統的な模様を使わない人なんてほとんどいませんから、描き方から教わるというのは、実はすごく重要なことかも知れませんね。



和義さんの作品、線描色絵金彩「前を見るライオン」。動物や植物をモチーフとした作品を多く手掛ける。



和義さんのアトリエにある本棚の一部。動植物の図鑑や名工の作品集など、様々な書籍が並ぶ。

秋 元： 面白いですね。大事なことから現在は研修所で伝えているのでしょうけど、昔は職人同士で教え合ったり師匠から弟子へ伝えたりしながら継承してきたのでしょうかね。



秋 元： 造形的な作品も色々手がけていらっしゃいますよね。

和 義： そうですね。でも僕は絵を描きたいんで、本当は平らな方が描きやすいんですよ。花瓶とかも平らな面を多くしているんです笑。最近の作品は、絵が描きやすいような形で作ることがほとんどですね。

秋 元： たしかに立体的なものは描きづらいですね。

和 義：僕はとにかく絵を見ていただきたいので、自分自身としては世間一般にいう陶芸家ではなく、工芸家だと思っています。絵を描いて、九谷焼の色絵と技法を使って工芸として仕上げていますので。九谷にはろくろを引くのが上手な人もいれば、造形にものすごく力を入れている人もいらっしゃいます。そんな中で、僕は絵で勝負していきたいと思っています。

秋 元： 九谷焼の絵付けは、一番の見せどころですもんね。

和 義： やっぱ壺や花瓶と比べて、皿に絵を描くときは一層気合が入るし、頑張って描いちゃいますよね。職人も作家もそれぞれ力を入れるところは違うと思いますが、僕は絵を続けていきたいし、伝統模様と九谷焼の色絵を使ったこの世界観というものを、もっと多くの人に伝えていきたいって思いながら、日々絵と向き合っています。



隆さんと和義さんが手がけた作品が所狭しと並んでいる。

この回のまとめ

お二人から感じたことは、九谷焼も時代と共に変化しているということだ。当たり前といえば当たり前だが、同じ絵付けの仕事でも、昭和から平成を生き抜いた隆さんと、平成から令和で仕事をする和義さんとは、だいぶ仕事の仕方が違っているのではないかと。一言で言えば、テーマやデザインの違いである。いつの時代でも作品の方向を決める強い要因に、購入者の好みがある。いくら作家が信じた世界を展開しても、それを支持してくれる人がいなければ作品は成り立たない。コレクターを納得させるだけの説得力を作品が持たねばダメだし、期待を裏切らない力量が必要だ。創造性は造り手が作るものと思いがちだが、案外購買者によっても決まる。誰に向けて作品を作っているかを意識することは重要である。時代感といえばそれまでだが、購買者の違いからテーマの違いが生まれているように思えた。

個性を生み出す技法

Techniques for creating individuality



九谷焼の芸術祭 KUTANiism

主催：クタニズム実行委員会 共催：小松市、能美市 協力：石川県九谷窯元工業協同組合、石川県陶磁器商工業協同組合、九谷上絵協同組合、九谷団地協同組合、公立小松大学、こまつKUTANI未来のカタチ、小松九谷工業協同組合 後援：北國新聞社、認定NPO法人趣都金澤

クタニズム実行委員会事務局

〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地(小松市役所観光文化課内) Tel: 0761-24-8130 Mail: info@kutanism.com



クタニズム

<https://kutanism.com>